

今月の

数字

66.8歳

(基幹的農業従事者の平均年齢)

松田 恭子

Profile まつだ・きょうこ ●津田塾大学国際関係学科卒業後、日本能率協会総合研究所で10年間公共系の地域計画コンサルタントとして勤務。その後、東京農業大学国際食糧情報学科助手を経て、現在、農業マーケティングアドバイザーとして農産物商品開発や販路開拓などをサポートする。(株)結アソシエイト代表取締役。

仕事で、久しぶりに伊豆に行った。熱海駅で乗り換えると温泉地に向かう観光客と一緒にいる。平日の公共交通機関ということもあるのだろうが、ほとんどが後期高齢者で、歩くのがやっという人も少なくない。改めて、日本が高齢社会に突入していることを痛感する。

他方、生産者のなかには^{かたつ}関連な高齢者も多い。例えば「東京しゃも生産組合」の組合長は80歳を超えてなお、生産に力を注いでいる。東京しゃもは、江戸の名物料理「^{しゃも}軍鶏鍋」としても有名な伝統の軍鶏の味を再現するため、東京都が十数年の歳月をかけて闘鶏用の軍鶏から闘争性を除き飼育に適した鶏種として開発したものだ。開発当初から東京都と生産者、料理店が手を携えてきた。組合長は軍鶏らしさを失わないよう料理店の評価を聞きながら、飼料の配合にも工夫を重ねてきた。

鹿児島県出水市では、アサクサ品種の海苔を復元し干出製法で栽培している。干出製法とは、海の中に立てた柱の間に海苔の胞子を植え付けた網を張り、潮の満ち干きにより1日3～4時間海上に海苔を出すことで、アオサなどの雑草の海藻を取り除く伝統的な手法である。海中にずっと漬けて浮流する製法に比べると海苔の成長は遅くなるものの、アオサを取り除く行程で酸を使わないため、「野性味のある香りと甘さ」と評価される品質のよい海苔を作ってきた。この海苔を支える生産者や販売者も高齢化が進んでいる。

東京商工リサーチの調査によれば、2016年の社長の平均年齢は、前年より0.3歳上昇して61.19歳だった。業種別にみると、信用金庫や信用協同組合など「協同組織金融業」が最も高齢で66.72歳だという。農業界では、農林水産省が発表した基幹的農業従事者の平均年齢は66.8歳だ。これは他業種に比べはるかに高い。

しかし、前年に比べると65歳以上の基幹的農業従事者は約10万人減少し、平均年齢はわずかながら若返りを見せている。

基幹的農業従事者は農業就業人口のうちで日頃から仕事をしている者を指す。農業の場合は、第一線からリタイアしたといっても多少の農産物は作っていて、「ウチは自家菜園程度だから大して作っていないよ」という人でもダイコンを数十本栽培していたりするから、都会の尺度では計れない。こうした農産物生産を活用することは大事だが、「地域活性化」として税金を使うべきではない。当事者は困っていないのだから、建前で「地域活性化」を叫んで、やる気がないのに補助金ありきで取り組みを進めるようなことは慎むべきだ。

高齢化により1次産業従事者の退出はマクロで見れば規模拡大や収益性の改善につながる可能性が大きい。しかし、情報のミスマッチにより高い技術を持つ産地の経営やノウハウがうまく継承していけない場合もある。農水産業の問題は、個別経営が背負う資産が大きい割に資本が小さいことだ。これまでは比較的高い農水産物価格に支えられて、漸次設備投資が可能だったかもしれないが、若い新規参加者がゼロから設備を一斉に整えてスタートするのは厳しい。今後、古い設備をだましまし使ってきた産地の事業承継を当事者だけに任せるのは難しいだろう。

世の中には残さなければならない経営、技術があり、待たなしの状態に入ってきている。これからも過剰な資産に個人的な経営が投資できるとは限らない。所有と経営、投資や役割の分担について、すでに形作られている現行の制度を社会構造の変化に対応させ再検討する時期に来ているように思う。